

論文の内容の要旨

論文題目 5歳児の描画表現活動における他者との関わりと表現の創発過程に関する研究
—社会文化的アプローチの視座から—

氏名 堀田 由加里

人が創造的な表現活動を行うためには、他者との協働的な関わりが必要となる。幼児が最初に表現活動を他者で行うのは、保育施設の集団生活の場においてである。特に、協働性が育まれる5歳児は、それぞれの幼児のアイデアから創造性を高めていく重要な時期である。また、幼児の表現活動を支えるためには、幼児同士の関わりを促す環境構成が重要となる。しかし、日常の園生活において、どのような幼児同士のやりとりや環境構成が幼児の描画表現を広げ深めるのかに関して必ずしも十分に明らかにされていない。本論文は、5歳児の描画表現活動において、描画を行う幼児が他者や周囲の環境とどのように関わり合い、それによって表現がいかに創発するのかを明らかにするものである。

本論文は全5部10章からなる。

第I部第1章では、本論文で対象とする描画表現活動を、園での自由遊びの時間における幼児同士で描く行為とし、5歳児の描画表現活動における他者との関わりを検討する意義について述べた。次に、社会文化的アプローチの視座から、バフチンの対話概念に基づき、描画表現活動における他者との関わりを「時間性」「他者性」「文化的道具」と捉え、理論的枠組みとした。そして、幼児の描画研究を概観し、以下5つの研究課題を導出した。すなわち、①保育における幼児の描画表現の縦断的な変容過程、②他児との親密性による描画表現の差異、③描画表現活動にお

ける他児の担う役割, ④幼児同士の即興的な関わりと描画表現の創発過程との関連, ⑤環境構成が幼児同士の関わりと表現過程に及ぼす影響, の5点を明らかにすることである。

第2章では, 上記の研究課題を達成するための方法について検討した。研究方法として, 参与観察, マイクロ・エスノグラフィー, ビデオ記録を用いることが有効であると考えられた。研究協力者は, 都内幼保一体施設および都内私立こども園の主に5歳児クラスであり, 自由遊びの時間を観察することとした。記録方法は, 幼児の自発的な描画場面をビデオで撮影し, 観察者が感じ取る幼児の心情やその場の雰囲気をもメモに記録する方法が適当と判断し採用した。

第II部では, 「時間性」に着目し, 幼児の描画表現スタイルと他児との親密性による描画表現の縦断的な変容過程について実証的に検討した。第3章(研究1)では, 幼児の描画活動における他者関係と描画表現の変容過程を検討するため, 他児との関わりが少ない男児1名(観察開始時5歳3ヶ月)に着目し, 1年間の観察データ32事例を分析した。結果, 4歳児では, 他児が自分の描画に興味を示す存在であることを認識するなかで, 「待ち」の時間のなかに関係性を形成しつつあった。5歳児4月以降, 描画を媒介に保育者を「意味のある他者」として認識し, 10月以降, 描画表現の拡張により複数の他児が関わるようになった。また, 「視覚的世界」の描出が中心の時期を経て「意味的世界」が表れるにつれ, 他児が各々の関心に基づき, 参入するようになった。このように, 他者関係の形成と描画表現との相互的關係が園の描画場面で生起していることが示された。

第4章(研究2)では, 幼児同士の関係性によって, 描画行為にどのような差異があるのかを検討するために, 女児1名(観察開始時5歳8ヶ月)に着目し, 8ヶ月の観察データ29事例に基づき分析した。結果, 親密性の高い他児には共に過ごす時間や場を重視し, リードされることの多い他児には相手の提案や指示を直接取り込み, 親密性の低い他児には自分の思いを優先させる傾向にあった。よって, 相手との関係性により対象児の描画に対する捉え方に違いがあり, 応答行為や発話に差異が生じることが示された。ただし, 描画活動の経験を重ね, 一定のルールを認識する過程で, 親密性にかかわらず描きたい思いを抑制したり, 相手の描画に合わせてたりするようになり, 親密性による描画行為の差異は, 仲間関係の質的変容に伴い変化が生じることが示唆された。

第III部では, 「他者性」に着目し, 幼児同士の即興的な関わりの特徴と構造について検討した。

第5章(研究3)では, 他児の応答行為と描画表現の展開を検討するため, 5歳児の1年間の観察データ87事例から抽出した他児の応答行為(562回)をカテゴリーに分類し, 描画テーマの共有性(同一または個別)と構成人数(2人または3人以上)の4つの描画形態に基づいて分

析した。結果、3人以上の幼児が同一テーマで描画活動を行う場合、描画表現を新たな展開へ拡張する応答行為が4つの描画形態の中で最も高かった。また、3人以上が個別テーマで描画活動に取り組む場合、「興味関心」「短答」「模倣」「感情の吐露」の生起率が他の描画形態より高く、多様な応答行為が生起することが示された。

第6章(研究4)では、幼児間の応答連鎖の特徴を検討するため、第5章の観察データから応答連鎖(494回)を抽出し「隣接ペア」(Shegloff & Sacks, 1972)に依拠し分析した。結果、第一に、他児の「提案」から描画児の「取り込み」が最も多く生起した(35回)。提案の内容をテーマ・モチーフ・アイデア、取り込み方を直接または間接に分類したところ、アイデアに関する提案は直接的な取り込みが多く、テーマやモチーフに関する提案は、間接的な取り込みが多かった。よって、具体的アイデアはそのまま描画に反映する一方で、抽象的なテーマやモチーフは描画児なりに変化を加え再現することが示された。第二に、他児の「疑問」から描画児の「短答」が次いで多く(30回)、疑問には「要請」に類似した内容を含み、表現を展開させる可能性が示唆された。第三に、他児の「感情表現」から描画児の「感情表現」が3番目に多く(28回)、描画過程で幼児同士が諸感覚を揺り動かし、情動的な連鎖が生起していることが示唆された。

第7章(研究5)では、幼児間の応答連鎖と相互了解の成立過程を検討するため、「フレームレベル」(Sawyer, 1997)に基づき、第5章の観察データから同一テーマで取り組む35事例を対象とし分析した。結果、第一に、フレーム外から明示的発話として提案をする「監督の声」が、6種類の応答行為において存在し、描画テーマを展開させる役割を果たしていた。第二に、明示的発話と暗示的発話が前後の文脈に応じて使い分けされていた。よって、描画活動においてごっこ遊びと同様のメタプラグマティック方略が幼児同士で行われている可能性が示唆された。第三に、「監督の声」を発する幼児が、特定の幼児に固定化されず、幼児が相互に行っていた。この要因として、描画それ自体がフレーム維持の機能をもつため、流動性や移行性の高いごっこ遊びと比較し、容易に参加しやすいことが考えられる。

第IV部では、「文化的道具」に着目し、環境構成が幼児同士の関わりと表現の創発過程に及ぼす影響について検討した。

第8章(研究6)では、OHPを用いた描画表現活動における幼児同士の関わりと表現の創発過程を検討するため、幼児の視点を「登場人物」「遊び手」「本人」、参照先を「ストーリー」「描画」「現実」に分類し、組み合わせから9つに類型し、5歳児の発話と描画行為(781回)を分析した。結果、「本人—描画」型の生起率が最も高く(23.0%)、「遊び手—ストーリー」(19.3%)、「登場人物—ストーリー」(17.8%)という順であった。また、幼児がOHPでスクリーンを見な

がら絵を操作する過程で、虚構場面をつくる「遊び手」や「登場人物」に立ちながらストーリーが展開された。よって、「本人」として現実的な応答を中心に行いつつ、光や拡大表示された描画を媒介に幼児同士でイメージの共有と拡張が促され、相互に「遊び手」や「登場人物」として虚構場面を深めていく過程が示された。

第9章（研究7）では、デジタル描画表現活動（タブレット端末の描画をスクリーンに表示）における他児の応答行為を検討するため、4～5歳児の観察データ42事例に基づき、注視対象に着目し分析した。結果、5歳児では、スクリーン注視の「テーマに関する質問」が4歳児に比べて有意に高かった。タブレット端末の描写の容易さや見やすさにより、描画の生成過程で描画全体のテーマを推測することが可能となることが示された。また、5歳児ではタブレット注視の「ツールに関する質問」「提案」が有意に高く、描画の拡大表示により、テーマに相応しいアイデアや知識を描画児に直接的に伝えることが示された。

第V部「総合考察」では、上記第I～IV部の知見をまとめ、5歳児の描画表現活動における他者との関わりと描画表現の創発過程について明らかになったことおよび今後の課題を検討した。本論文の知見は以下の3点である。第一に、行為主体である描画児、応答する他児、両者を媒介する環境の三者の相互作用のなかで新たな描画表現は創発される。すなわち、他児による応答行為の特質の差異が、環境構成に応じて描画児の表現の展開に相違を生じさせる。第二に、幼児の社会的スキルと仲間関係との相互作用により、螺旋的に描画表現が拡張していく。第三に、文化的道具の媒介により、描画が異なる様態で外化、明示化されることで、幼児の内的イメージが対象化され、幼児間の共通理解を促す。

本論文の意義は、日常の保育の社会文化的状況から、幼児の描画表現活動の変容過程のメカニズムを明らかにしたことに加え、幼児が先行する描画や他児の発話を共有するなかで、創発性を生み出していく過程を示したことにある。今後の課題として、本論文で示した変容過程のメカニズムについて4歳児や就学期以降との関連を検討すること、および保育者の関わりや態度、それらを形成する信念や価値観について検討することが求められる。